Black Apple

夏騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black Apple

【コード】

N6542K

【作者名】

夏騎

【あらすじ】

「その実は食べてはいけないよ」

昔、そう父に言われた。

でも、俺には赤色の、よく熟した林檎にしか見えない。

あれから十年。

禁断の果実を手にした敵が、
俺たちを襲ってきて…！？

第？話 始まりの果実

「その実を食べてはいけないよ」

「どうしてですか、お父様」

「その実は、沢山の不幸を食べた者に与えてしまっんだ」

「でも、こんなに綺麗な赤いリンゴなのに」

「赤くはないよ。よく見てごらん。ほら、黒いだろっ？」

「いいえ、お父様。このリンゴは赤くてよく熟した実です」

「そんなに食べたければ勝手にしろ。何があっても私は知らぬぞ？」

「…分かりましたお父様。私はこの実を口にはいたしません」

「それでよいのだ。私の可愛いヒイロ…」

俺はその、黒い林檎不幸の実と呼ばれた果実を、
近くの泉へ投げ捨てた。

「さあ家へ帰ろう。お母様が待っているぞ」

「はい、お父様」

「ん…」

ここは暗い一室。

全体的に白い壁で囲まれている、古いアパート。

「…なんだってあんな昔のことを…」

俺は昔の夢を見ていたようだ。

そのときノックが聞こえた。

「…どうぞ」

勢いよく開いた扉から赤い髪の女が入ってきた。

「なんだ、ロゼッタか」

「なんだとはなんだ！せつかく遅刻寸前のお寝坊さんを、このロゼッタ様が起しに来てやったのに…」

「ん？遅刻だつて？」

「そ」

俺は寝癖の付いた頭をかく。

「いつものことだろ」

「いつも遅刻してるんじゃないでしょ！？」

「先生には適当に言つといて。俺は二時間目からであるから」

そついつて俺はまた布団を被り寢床に付く。

彼女はロゼッタ「ヌーン」。

俺と同じアパートの住人。

「~~~~、とにかく、行くよ！！」

そついつてロゼッタは俺から布団を無理矢理はがす。

「あゝもう分かったから！外に出て、待ってる！！」

ボタンと扉を閉める。

俺たちの通っている学校は魔法や武術を学ぶ、
謂わば、戦闘員養成所のようなところだ。

俺は青いブレザーを白いシャツの上に羽織り、
黒いズボンを履く。

白い靴下に茶色い靴を履き、

ブレザーの襟にAのバツ準トップクラスチを付け、
そのまま洗面所へ直行。

顔を洗い、
寝癖の付いた髪を濡らし、整える。

「早くしてよ、あと五分で遅刻し！」

ロゼッタの叫びも無視して、鞆に荷物を詰め込む。

「待たせた」

「ほんとだよ!!」

ロゼッタはムッス〜と頬を膨らませ俺を睨む。

う〜ん、普通にしていれば可愛いだけけど…
まざそれは無視の方向で。

「さ、行くつか。ロゼッタ」

「うんっ!!」

第？話 始まりの果実（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

夏騎の第一作目でございます

これから、主人公、ヒイロの
熱い（むしろ蒸し暑い）青春や、
戦いが待っています！！

どうぞ続きも。

第？話 国立ガドウィン学園風紀委員

「あゝ、もう間に合わないよう!!」

ロゼッタは慌ただしく、錆びたアパートの階段をガチャガチャと音を立てながら下りる。

「…コレ、ロゼッタも使うか？」

「へ？」

ロゼッタの目の前に差し出したのは小さなビンに入った黄色い粉。

「え、またコレ使う気？」

「うん」

「もったいないよ」

「大丈夫。また研究室からくすねるから」

うゝんと、ロゼッタは腕を組み考え始めた。遅刻するんじゃないかったのかよ。

「分かった。でも今日は特別、だよ？」

「はいはい」

俺はピンを手のひらの上で逆さにひっくり返し、
中の黄色い粉をすこし出す。
黄色い粉はキラキラ光って、太陽の光を反射している。

ピンを鞆の中に詰め、

そしてその粉を2人分に少しずつ両手で分ける。

「おい、目、つぶっとけ」

「ん」

そして、右手の粉は俺に、
左手の粉はロゼッタに対して振り掛ける。

「んん…」

体中がフワッと軽くなり、
体が空に浮く。

「よし」

「流石、ヒイロ　こんなに少ない量で飛べるなんて知らなかったよ」
ニマニマした目で俺を見るロゼッタ。
嫌味か。

「行くぞ」

「はっい」

学園

学園の門には、

「国立ガドウィン学園」
と彫られた、柱が一本と、普通の柱が
反対の右側に立っている。

そしてその門の前には、
風紀委員と呼ばれる彼らがいた。

俺たちの間では、彼らは
デビルハンター
悪魔の門番と呼ばれているほど、
厳しい連中だ。

「おい、降りるぞ」

「うい」

俺等は空からゆっくりとできるだけ物音を立てないように
草むらに下りる。

そして何事も無かったかのように
俺達と同じく、遅刻しそうな連中に混じって走る。

「ちょっと待って」

門をくぐり終える途中で呼び止められた。

ゲ…

「貴方、鞆の中ちょっと見せてくれない？」

「はい…」

俺はしぶしぶ鞆を手渡そうとする。

「？貴方じゃないわ、そっちの彼よ」

「え？」

どうやら呼びかけられたのは俺ではなかったらしい。

呼びかけた女は、

黒髪のロングで、かなりの長身（モデルかよ）。

大きな黒い瞳は見ているもの全てを凍らせそうな
吊り目で赤いメガネをかけている。

「って、お前ケイじゃん！！」

「あら、やっと気が付いた？」

当然でしょ、のような

顔で、こっちを振り向かずに答える。

彼女はケイ＝ガドウィン。
この学校の理事長の娘。

「なんで漫画が入っているの？ 必要ないでしょう」

「すみません…」

持ち物検査をされている男は漫画を没収される。

と、思ったら返された。

「反省文、10枚書いてきなさい」

「え、あ…はい!」

男は小走りで校内に入っていく。

こついつ小さなことが優しいと思う。

ここの学園は没収したものを卒業までに返さないという。

鬼だ。

ケイは手に持っていた下敷きに挟んだプリントに
何かを書き込み始める。

「何書いてるの？」

「遅刻者の人数。貴方も混ぜていいのかしら？」

「へ？あ!」

気が付くと、俺の姿はそこには無かった。

「もう、ヒイロはなんで言ってくれないのかな？！」

叫びながらロゼッタは走り出す。

第？話 日本からの転校生

「で、私を置いて行ってしまったヒイロさん？動機は」

「はい。ぶっちゃけ、貴女を置いて行くのは快感であります故」

ドカッ！！

もの凄い轟音と共に

鉄拳が飛んできた。（しかも裏拳）

「いつてえ…手加減しろよ」

「五月蠅い。今日はこれだけで許してあげる」

フィットとそっぽを向いて一人で教室に向かうロゼッタ。

俺は珍しくその背中についていつてやった。

ユサユサと揺れる赤髪ポニーテイル女は

教室に入り、左から3番目の一番後ろという、なんとも微妙な席に座る。

「残念だったな、ロゼッタ。真ん中の列、かつ、一番後ろという、嬉しいんだか嫌なのか分からん席だ」

また殴られた。

次は腹を。

「グハッ」

「あゝいいなあ、ヒイロの席」

俺の席が一番端の列でしかも窓側。
そして前から3番目。

ロゼッタよりは何倍もマシな席。

「いいだろ」

次は殴られるのを覚悟して

防御対策満載のポーズで待ち構える。

「…誰も三回も殴らないし」

「う…」

その冷めた目が一番効果抜群だ…

「おい、席に着け」

教室に入ってきた先生が、大声で言う。

「ホームルームをはじめる」

「きり〜つ、礼〜」

日直が号令をかける。

やる気の無い声の主は

ケヴィン＝レイオ。

金髪金眼の美少年。

身長が低いのが悩みらしい。

問題児なので、真ん中の列の一番前。

「今日は転校生がきている。日本人だ」

先生が手招きすると、黒髪の美少女が入ってきた。

他の奴等とは何か違うオーラが出ている。

前髪はパツツンで腰よりちょい上の長さ。

「シンイン「モト神維小宵と言います。よろしく」

不覚にも俺は彼女に見惚れてしまった。

お人形さんのような容姿。

身長は低く（多分ケヴィンよりも）制服は日本のものなのだろう、

黒いセーラー服に赤いライン。

スカートの丈は膝下七センチ。

「私の顔に、何か付いていますか」

「え？あ、いや別に！！」

俺の視線に気付いた彼女（小宵）。

クラス中が笑いに包まれる。

「……………」

1人、ロゼッタだけが笑っていなかった。

…小宵ちゃんも。

第？話 小宵のサボリ

「ね。小宵ちゃんも一緒に」

移動教室。

彼女は部屋が分からないだろうから、
ロゼッタとケヴィンと声をかけてみた。

「…いい。一人で行く」

「そんな事言わずにさ…」

バシッ

差し伸べたロゼッタの手を叩く小宵。

「おい、何してんだよ!」

慌てて止めに入る俺。

「…ほつとこーぜ。しらねーよこんな奴」

ケヴィンは両手を頭に回し、教室を出て行く。

「あ、待てよ!」

「…先に行ってるね」

「……………」

研究室

「はい、今回は…えっと…人種について、えっと勉強…しま、す」

彼女は世界化専門教師のリコル先生。

藍色の髪をお団子にまとめて黒縁メガネを掛けている。

「人種。つまりですね…私達の住んでいるオリヴィアは人間の住む町。そして、隣の国、キオンは…えっと…ジェリアという、人種が住んでいます。今回は彼らについて勉強します」

リコル先生は教科書の横の青い本を開き、人差し指を大きな長方形を描くように宙で動かす。すると書いた線が浮かび、白いボードになる。

「えっと、彼らジェリオ族は、人間よりもはるか昔に生まれた人種で、えと…容姿は…耳が動物の耳で、尻尾が生えています。その他は、全く同じなのですが、人間よりもはるかに五感に優れていて…え、と…」

リコル先生の噛み噛みの説明を聞いていると、全員の母性がくすぐられるようで、皆花を飛ばしているようなオーラに包まれる。

「…先生」

「は、はい!??..」

「気分が悪いので、保健室に行きます」

「え、誰か一緒に…」結構です」

そういつて小宵は研究室を出て行く。

「んだよ…性格悪そうだなアイツ…」

「ハブにされるかもね」

ボソボソと声が聞こえる中、リコル先生はプチパニックに陥ってしまった。

「先生、授業続けましょう」

ロゼッタが先生に呼びかける。

「そ、そうですね…」

保健室

「失礼します…」

「あらロゼッタさん。どうかした?」

保健化の先生、ノエル先生。
茶髪のセミロングの先生で結構な美人。
とても生徒に大人気。

は、おいといて。

「えっと、小宵さんは…」

「帰りました」

「え？」

「いや、私は何も…」

「…失礼します」

ズカズカと中に入り、
ベットの周りのカーテンを開く。

「小宵ちゃん」

「…ツチ」

小宵は寝返りをうつ。
さっきの
帰りました。

は、小宵が言ったのだろっ。

「ちよっと話、いい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6542k/>

Black Apple

2010年10月9日19時53分発行